



被視点取得の知覚，感情と思考の伝達および被視点取得欲求が対人認知に及ぼす影響

著者	鈴木 雄大, 田中 知恵
その他のタイトル	The effect of perceived perspective-taking, communicating emotion and thoughts and desire for getting taken perspective on interpersonal cognition.
URL	http://hdl.handle.net/10723/00003918

被視点取得の知覚，感情と思考の伝達および被視点取得欲求が 対人認知に及ぼす影響^{*1,*2}

The effect of perceived perspective-taking, communicating emotion and thoughts and desire for getting taken perspective on interpersonal cognition.

鈴木 雄大
Yudai Suzuki

田中 知恵
Tomoe Tanaka

本研究では，他者に視点取得されたという知覚（被視点取得の知覚）が被共感の知覚，自他の重なる知覚（i.e., 他者との類似性・アイデンティティの共有・親密さの知覚），他者への好感，および関係構築意思を高めるか検討した。さらに，視点取得されることが他者への好感を高めるプロセスを検討した。記述課題にて感情と思考の伝達の有無を操作し，またパートナー（実際には存在しなかった）からのフィードバックによって他者からの視点取得の有無を操作した。その結果，被視点取得の知覚が被共感の知覚，自他の重なる知覚，他者への好感，および関係構築意思を高めることが示唆されたが，感情と思考の伝達および被視点取得欲求による調整効果はみられなかった。被視点取得の知覚が被共感の知覚を高め，それによって自他の重なる知覚が高められ，最後に好感や関係構築意思を高めることが示唆された。

キーワード：被視点取得の知覚，感情と思考の伝達，被視点取得欲求，被共感の知覚，関係構築意思

*1 本研究は，2018年度明治学院大学心理学研究科心理学専攻修士論文を加筆・修正したものである。

*2 本研究は明治学院大学心理学部倫理綱領に従い，明治学院大学心理学部倫理委員会の承認（承認番号 2017001）を得て行われた。

問題

私たちは，困難な状況にいる他者を見たり，その他者の境遇について話を聞いたりした際，「彼（彼女）の立場なら，どう感じるだろうか」というように，自分ではなく他者の視点からその他者の経験や境遇について考えることがある。このように，他者の視点から世界を考えることを視点取得という（Galinsky, Maddux, Gilin & White, 2008）。視点取得を促す指示によって他者への共感の有無を操作できることが指摘されており（e.g., Batson

et al., 1989; Batson et al., 1997a; Stotland, 1969），人は他者に対して視点取得するとき，そのターゲットに対して共感すると考えられている。共感の定義はいくつかあるが，これらの研究における共感とは，他者指向的感情反応をさす（Batson et al., 1997b; Galinsky et al., 2008）。他者指向的感情反応とは，たとえば喜んでいいる他者を見て賞賛の気持ちを抱いたり，悲しんでいる他者を見て同情の気持ちが生じたりすることをいう。視点取得の有無によって操作された共感が利他的行動を促進す

ることが指摘されている (Batson et al., 1989)。

多くの研究では、視点取得することの効果を検討されてきた。しかし近年、視点取得されることについても焦点が当てられ、他者に視点取得されたと思うこと (以後、被視点取得の知覚とよぶ) の効果について検討されている (e.g., Berndsen, Wenzel, Thomast & Noske, 2018; Goldstein, Vezich & Shapiro, 2014)。具体的には、いじめの被害者が加害者からの視点取得を知覚すると、加害者を許しやすくなること (Berndsen et al., 2018)、他者に視点取得されたという情報を伝えられるだけで、その他者から共感されたことと知覚すること (以後、被共感の知覚とよぶ)、その他者との類似性、アイデンティティの共有の程度や関係の親密さ (以後、自他の重なりとよぶ) を高く知覚すること、またその他者への好感が高まることが指摘されている (Goldstein et al., 2014)。そしてこの効果のプロセスとして、被視点取得の知覚が他者への好感を高める効果は、被共感の知覚および自他の重なりを知覚が高まることによって媒介されることが示された (Goldstein et al., 2014)。ただし、どんな場合においても視点取得されることが他者への好感を高めるといったポジティブな効果をもつわけではなく、その効果を調整する要因が指摘されている。Goldstein et al. (2014) は、経済的背景が中間層の学生を対象に、学生会選挙の立候補者が「学費の値上げに反対する」という公約を掲げている場面を想定して、他者に視点取得されることの効果について検討を行った (Experiment 6)。具体的には、立候補者に視点取得されたという情報が提示される視点取得条件では、学生会選挙に向けたインタビューにおいて、立候補者は学費の値上げに反対することについて学生の視点にたって考えており、学費が上がることによって学生が感じる不安やストレスといった苦痛を理解し、そして経済的に困難な学生の助けになりたいと答えたという記事が提示された。一方で立候補者に視点取得されたかどうかについての情報が提示されない統制条件では、立候補者は学費の値上げに反対しているということだけが記載されたインタビュー記事が提示された。

さらに、立候補者からの視点取得の有無に加えて、その立候補者が経済的に中間層ないし裕福層であることが告げられ、立候補者の経済的背景が操作された。その結果、立候補者が中間層の場合には、立候補者からの視点取得によって、被共感の知覚および自他の重なりを知覚が高まり、またその立候補者への投票意思が高くなっていった。一方で、立候補者が裕福層の場合には、立候補者からの視点取得の有無による被共感の知覚および自他の重なりを知覚の差はみられず、またその立候補者への投票意思は視点取得されなかった条件よりも視点取得された条件の方が低くなっていった。裕福層の立候補者が中間層の学生 (i.e., 実験参加者) に視点取得をした場合、投票意思が低下するという、他者に視点取得されることがその他者にとって不利益となる効果をもつ可能性が示唆された。このことについて、他者に視点取得されたとしても、その他者の視点取得能力が十分でないと判断された場合には、その他者にとってネガティブな効果が生じる可能性を指摘している。

Goldstein et al (2014) が操作した他者の経済的背景という要因は、相互作用する人物と参加者の経済的背景の一致・不一致という社会的条件であった。この要因は、立候補者が参加者の視点を取得するための能力を有していたかどうかだと解釈することは可能だろう。学費が高騰するという問題において、参加者と経済的背景が同じ中間層の立候補者は、同じような生活水準であり、この問題について感じることや考えることが似ていると予想される人物であった。そのため、中間層の立候補者は学費が上がるという問題において中間層の人 (i.e., 参加者) がどのように考えるか予測が可能な人物であり、視点取得するための手がかりをすでにもっていた人物だといえる。一方で裕福層の立候補者は、中間層の人よりも裕福な生活をしており、学費高騰という問題について感じることや考えることが異なると予想される人物であった。そのため、裕福層の立候補者は学費が上がるという問題において中間層の人がどのように考えるか予測が不可能な人物であり、視点取得するための手がかりをもっていなかった人物だとい

える。

しかし一方で、立候補者の経済的背景の違いによって視点取得されることの効果の違いがみられたのは、立候補者のもつ属性についての認知が異なったためであるとも考えられる。すなわち、経済的に中間層の参加者にとって立候補者が裕福層という異なる属性をもつ人物であったか、ないしは中間層という同じ属性をもつ人物であったかという、相互作用相手の属性による効果としても解釈できるだろう。さらに、経済的な背景という社会的な条件のもと、相互作用相手が外集団ないし内集団と認知されており、集団間の効果が見られていた可能性もある。Goldstein et al. (2014) では視点取得者が視点取得の手がかりを持っており、十分な視点取得能力をもつ人物だと評価されたのか否かと、視点取得者のもつ属性ないし所属集団の認知が区別されておらず、それぞれの独立した効果については明らかになっていない。したがって、視点取得されたときの効果についてより詳細に明らかにするためには、相互作用相手のもつ属性の認知の効果とは区別して、視点取得者が視点取得の手がかりを持っているか否かの効果について検討する必要があると考えられる。

では、視点取得するための手がかりとなる情報にはどのようなものがあるだろうか。そのひとつとして、相互作用相手の感じ方や考え方についての知識があげられる。たとえば、初対面の相手がどのように感じるか、また考えるかをその人の視点で考えることは難しい。一方で付き合いの長い知人についてならば、それまでの交際経験からその人の感じ方や考え方を知っているため、その知識からその人の感じ方や考え方を予測できるだろう。ただし、初対面の他者に対してであっても、それらの手がかりは伝達されることによって得ることができると考えられる。Goldstein et al. (2014) をはじめ、多くの視点取得に関する実験では、初対面の他者との相互作用場面が想定されている (e.g., Davis, Conklin, Smith, & Luce, 1996; Goldstein et al., 2014; Ozwald, 1996)。その際、相互作用相手についての情報が提示されることによって、その人物の考え方や感じ方といった視点

取得の手がかりとなる情報が伝達されることになる。そこで本研究では、視点取得される場面でのコミュニケーションにおける伝達内容に注目する。具体的には、ある経験について他者に話すとき、その経験において自分はどのように感じたのか、考えたのかという情報を伝達するか否かを操作する。これにより、他者が視点取得の手がかりを持っているかどうかを直接的に操作できると考えられる。

Goldstein et al. (2014) では、被共感の知覚および自他の重なる知覚に経済的背景の差 (中間層・裕福層) の主効果がみられ、どちらも立候補者が中間層の条件の方が高く評価されており、さらに裕福層条件では立候補者が嫌悪の対象になり得たと指摘されていた。一方で、本研究では感情と思考を伝達するか否かによって他者が視点取得するための手がかりを持つか否かの有無を操作しており、この操作によって自身と他者のもつ属性が異なると判断されることや、異なる集団に属する人だと認知される可能性は低いと考えられる。そのため、感情と思考を伝達しなかったことによって、視点取得されることのネガティブな効果がみられるとは考えにくい。すなわち、Goldstein et al. (2014) で示された視点取得された人が視点取得者にとってネガティブな行動を取りやすくなるといった効果は示されないと考えられる。むしろあらかじめ他者に感じ方や考え方を伝えることは、その他者に、より具体的な感情と思考の想像を可能にさせ、視点取得された際の効果を促進する要因になると考えられる。このことから、感情と思考を伝えないで視点取得されるよりも、感情と思考を伝えて視点取得される方が被共感の知覚および自他の重なる知覚が高く評価され、また他者へのポジティブな評価が促進されると予測する (仮説1)。

本研究では、他者へのポジティブな評価の指標として、関係構築意思および他者への好感を取り上げる。関係構築意思とは、初対面の他者との相互作用のあと、その他者と友人になり、交流を持ちたいと思うことをさす。たとえば就労場面などで新入社員同士が良好な対人関係を築くことは、

その後の社会生活を円滑なものとするためには重要だと考えられる。このように、初対面の他者と良好な関係を築かなければならない場面は少なくない。そこで本研究では、他者への好感に加えて関係構築意思を他者へのポジティブな評価の指標とする。

さらに、本研究では被視点取得の知覚の効果を調整する可能性のある個人差変数として、被視点取得欲求に注目した。被視点取得欲求とは、他者に視点取得されたいという欲求をさす(鈴木・田中, 2017)。人がもつ多くの欲求において、人は自分の欲求を満たしてくれる他者や対象に対して好感を示すと考えられる。このことから、高い被視点取得欲求を示す人は、視点取得された際に他者をよりポジティブに評価すると予測する(仮説2)。

また本研究では、被視点取得の知覚が他者へのポジティブな評価を促進するプロセスについて検討する。具体的には、Goldstein et al. (2014)で示されたモデル(Figure 1)について、被視点取得の知覚が視点取得者へのポジティブな評価を高める効果が、被共感の知覚および自他の重なるに媒介されるかどうかを検討する。

方法

参加者

主都圏にある大学に通う学部生および大学院生54人(男性12人 女性42人)であった。平均年齢は22.28歳($SD = 2.59$ 歳)であった。

実験デザイン

被視点取得の有無(2)×感情と思考の伝達の有無(2)の二要因参加者間計画であった。

手続き

実験には、1名から5名まで同時に参加した。参加者は、コミュニケーションについての調査と説明され、別室で待機する参加者とランダムにペアを作ると教示された。ペアを作成するためにくじを引いてもらったあと、ペアになった別室の参加者(以後、パートナー)に読んでもらうためのポジティブな経験に関するエッセイを書くよう求められた。しかし実際には別室に参加者はおらず、実験者が架空のフィードバックを行うことで被視点取得の有無の操作を行った。また、記述課題で感情と思考の伝達の有無が操作された。伝達あり条件の参加者は、記述してもらう出来事について、そのときどう感じたかを中心に記述するよう教示された。一方で、伝達なし条件の参加者は、感じたことや考えたことには一切触れずに、日時や場所、その他の具体的な情報について、その出来事を詳細に記述するよう教示された。記述課題は5分間であった。

記述課題後、参加者は被視点取得欲求および記述した経験のポジティブさ(嬉しかった程度・楽しかった程度各1項目)に回答した。その後、参加者が記述した文章をパートナーに読んでもらうと説明し、5分間の待機時間を設けた。待機時間中、参加者は実験者の知人の予備調査と説明された迷路課題に取り組んだ。これは、待機時間中の状況を統制するために行われた。

待機時間のあと、参加者は、パートナーがエッセイを読んだ際に参加者に対して視点取得したか否かについて、被視点取得の有無を操作するための架空のフィードバックを受けた。フィードバックを確認したあと、参加者はパートナーからの共

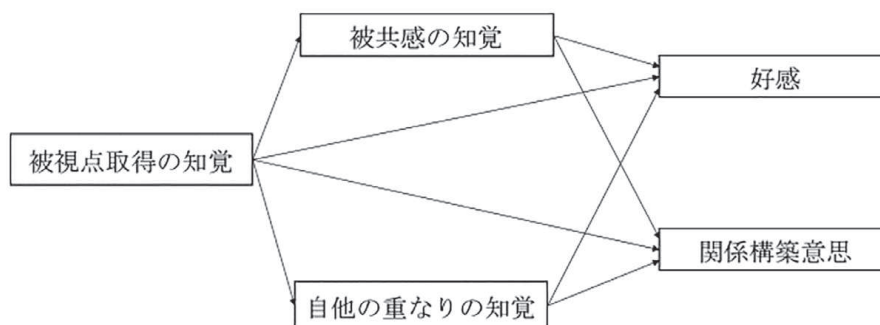


Figure 1. 被視点取得の知覚が他者へのポジティブな評価を促進するプロセス。

感の知覚（被共感の知覚）、パートナーとの自他の重なるの知覚（自他の重なるの知覚）、パートナーへの好感（好感）およびパートナーとの関係構築意思（関係構築意思）や、被視点取得の有無の操作チェック項目、参加者の年齢および性別について回答した。最後にディブリーフィングが行われた。

被視点取得の有無の操作

被視点取得の有無は、参加者が記述した文章を読んだパートナーの反応をフィードバックすることで操作された。フィードバックはパートナーが回答した質問紙として参加者に配布された。実際には、実験者が作成した架空のものであった。この架空の質問紙には、参加者のくじ番号、パートナーが参加者の記述した文章を読んだときに視点取得した程度、および参加者の性別にあわせてパートナーの性別が記載されていた。

パートナーが参加者の視点を取得した程度は3項目7件法で構成された。具体的には、パートナーが参加者の記述したエッセイを読む際に、心の中で参加者の立場に立ったと思う程度、記述された出来事を実際に経験するかのように想像したと思う程度、および参加者がどのように感じたかを想像したと思う程度が測定された。これらの項目は、数値が大きいほど視点取得したと解釈できるようになっており、被視点取得あり条件では、平均6（順に7, 5, 6）になるよう設定された。一方で、被視点取得なし条件では、平均2（順に1, 3, 2）になるよう設定された。項目は、Davis et al. (1996)における視点取得条件への教示文を参考に作成された。

被視点取得欲求

記述課題後の質問紙で測定された。記述してもらった文章について、パートナーに心の中で参加者の立場に立って読んでもらいたい程度、パートナー自身が実際にその出来事を経験したかのように想像して読んでもらいたい程度、および記述した出来事を参加者自身が経験した際にどう感じたかをパートナーに想像して読んでもらいたい程度の3項目7件法（1:全くあてはまらない—7:非

常にあてはまる）で測定した。項目は、Goldstein et al. (2014)における被視点取得の知覚の定義と、Davis et al. (1996)における視点取得条件への教示文を参考に作成された。

従属変数

従属変数は、パートナーの反応のフィードバック後に質問紙を用いて測定された。

被共感の知覚 参加者が記述した文章をパートナーが読み、パートナーは参加者にどの程度共感したと思うかについて、1項目7件法（1:全く共感しなかった—7:非常に共感した）で回答を求めた。本項目はGoldstein et al. (2014)を和訳して作成された。

自他の重なるの知覚 参加者がパートナーとの自己概念の重なり（Self-other Overlap）をどの程度知覚しているかについて、似ている程度、親密さを感じる程度、パートナーの持っているパートナー自身の自己イメージと参加者の自己イメージが似ている程度、身近な存在である程度、およびパートナーとの絆があると感じる程度の5項目7件法（1:全くあてはまらない—7:非常にあてはまる）で回答を求めた。これらの項目は、Goldstein et al. (2014)で自他の重なりを測定するために用いられた8項目を和訳し、その中から日本語として意味を解釈しにくい3項目を排除して作成された。加えて、Goldstein et al. (2014)と同様に、自己を表現する円と他者を表現する円について、その重なる程度によって知覚された自他の重なりを測定するIOS尺度（Aron, Aron & Smollan, 1992）を1項目7件法で設定した。

好感 参加者がパートナーに対して、どの程度好感を抱いているかについて、1項目7件法（1:全く好感を抱いていない—7:非常に好感を抱いている）で回答を求めた。本項目は、Goldstein et al. (2014)で用いられた他者への好感を測定する1項目を和訳して作成された。

関係構築意思 参加者がパートナーとの関係を構築したいと思う程度について、パートナーに話をまた聞いてもらいたい程度、パートナーと友達になりたい程度、およびパートナーと実際に会い

たい程度の3項目7件法（1：全くあてはまらない～7：非常に当てはまる）で回答を求めた。これらの項目は、関係構築意思の定義（i.e., 初対面の他者との相互作用のあと、その他者と友人になり、交流を持ちたいと思うこと）から、その程度を測定するために考案、作成された。

操作チェック項目と統制変数

感情と思考の伝達の有無についての操作チェック項目として、記述課題において感情および思考についての記述がどの程度であったか回答を求めた。感情および思考それぞれ1項目7件法（1：記述していない～7：記述した）であった。

視点取得の有無についての操作チェック項目として、フィードバック確認後の質問紙で被視点取得の知覚の程度について回答を求めた。参加者が記述した文章を読んだときのパートナーが、心の中で参加者の立場に立ったと思う程度、パートナー自身が実際にその出来事を経験したかのように想像したと思う程度、および記述した出来事を参加者自身が経験した際にどう感じたかを想像したと思う程度の3項目7件法（1：全くあてはまらない～7：非常に当てはまる）であった。

統制変数として、記述内容のポジティブさの評価を回答してもらった。これは、記述課題における記述内容がよりポジティブな経験であるほど、その経験を思い出したことによって参加者にポジティブ感情が生じ、その感情がパートナーの評価に影響する可能性が考えられたため採用された。記述課題の際、楽しかったことや嬉しかったことを思い出して記述するよう教示したことに合わせて、記述してもらった経験の嬉しかった程度および楽しかった程度についてそれぞれ1項目7件法（1：全くあてはまらない～7：非常に当てはまる）で測定した。

結果

操作チェック

記述課題における教示による操作について確認するため、記述してもらったエッセイに参加者自身の感情と思考についての表現が含まれているか

どうかを、すべての参加者の記述文を読んで確認した。その結果、感情と思考の伝達なし条件では、それらの表現を含む記述文は見当たらず、感情と思考の伝達あり条件では、それらの表現を一切含まない記述文は見当たらなかった。したがって、操作はうまくいっていたと判断された。くわえて、記述課題で感じたことおよび考えたことをどの程度記述したかについてたずねた2項目（ $r = .73, t(52) = 7.71, p < .001$ ）の項目平均値を従属変数として、2（被視点取得の有無）×2（感情と思考の伝達）の分散分析を行った。その結果、感情と思考の伝達の有無の主効果が有意であり（ $F(1, 49) = 215.41, p < .001, \eta_p^2 = .81$ ）、感情と思考の伝達あり条件（ $M = 5.77, SD = 1.97$ ）は感情と思考の伝達なし条件（ $M = 1.33, SD = 1.92$ ）よりも記述課題における感情および思考についての記述量が多かった。被視点取得の有無の主効果（ $F(1, 49) < 1, n.s., \eta_p^2 = .00$ ）および交互作用効果（ $F(1, 49) < 1, n.s., \eta_p^2 = .01$ ）は有意でなかった。

つぎに、被視点取得の有無の操作について確認するため、被視点取得の知覚の程度について検討した。まず、被視点取得の知覚の程度の3項目（ $\alpha = .91$ ）の項目平均を被視点取得の知覚得点とし、その得点が尺度の midpoint（4）を超えているか否かを確認した。具体的には、被視点取得の知覚なし条件では被視点取得の知覚得点が尺度の最小値（1）から midpoint（4）までの間であることを、被視点取得の知覚あり条件では midpoint（4）を超えていることを基準とした。その結果、被視点取得の知覚なし条件ではすべての参加者が基準を満たし、被視点取得の知覚あり条件では基準に満たない参加者が1名であった。基準に満たなかった参加者は本操作チェックの3項目において5以上の回答が1項目もみられなかったため、操作できていなかったと判断し、これ以降の分析から除外した。その結果、分析対象者は53名（男性11名 女性42名）となった（Table 1）。分析対象者の平均年齢は22.30歳（ $SD = 2.61$ 歳）であった。分析対象者となった53名について、被視点取得の知覚得点を従属変数とした2（被視点取得の有無）×2（感情と思考の伝達の有無）の参加者間分散分析を行った。

Table 1 性別および条件ごとの分析対象者数

被視点取得	あり		なし	
	あり	なし	あり	なし
感情と思考の伝達				
男性	3	3	2	3
女性	10	10	11	11

その結果、被視点取得の有無の主効果が有意であり、被視点取得あり条件 ($M = 5.62, SD = 0.48$) は、被視点取得なし条件 ($M = 1.92, SD = 0.75$) よりも高くパートナーからの視点取得を知覚していた ($F(1, 49) = 421.94, p < .001, \eta_p^2 = .90$)。感情と思考の伝達の有無の主効果 ($F(1, 49) < 1, n.s., \eta_p^2 = .01$) と交互作用効果 ($F(1, 49) < 1, n.s., \eta_p^2 = .00$) は有意でなかった。

被視点取得の有無の効果の検討

被視点取得の有無が被共感の知覚、自他の重なるの知覚、他者への好感および関係構築意思を高めるのか、またその効果を感情と思考の伝達の有無および被視点取得欲求が調整するのか検討するため、重回帰分析を行った。被視点取得の有無および感情と思考の伝達の有無はダミー変数（それぞれ、あり = 1 なし = 0）に変換され、被視点取得欲求は、3項目の項目平均 ($\alpha = .65$) をその得点とした。すべての変数は標準化された。分析には、統制変数として性別（女性 = 0 男性 = 1）、記述した経験の嬉しかった程度および楽しかった程度が、説明変数として視点取得の有無、感情と思考の伝達の有無、被視点取得欲求得点、

およびこれらの説明変数のすべての組み合わせによる交互作用項が投入された。

被視点取得の有無および感情と思考の伝達の有無による条件ごとの従属変数（被共感の知覚・自他の重なるの知覚・他者への好感・関係構築意思）の平均値および標準偏差をTable 2に示した。

被共感の知覚 被共感の知覚を測定した1項目の得点を被共感の知覚得点として、その得点を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、被視点取得の有無のみに有意な標準偏回帰係数がみられた ($\beta = 0.88, t = 12.22, p < .001$)。被視点取得あり条件 ($M = 5.08, SD = 0.78$) は、被視点取得なし条件 ($M = 2.04, SD = 0.88$) よりも被共感の知覚得点が高かった。決定係数は有意であった ($R^2 = .79, F(10,42) = 15.91, p < .001$)。多重共線性はみられなかった ($VIFs < 1.58$)。重回帰分析の結果をTable 3に示した。

自他の重なるの知覚 自他の重なるの知覚を測定した6項目 ($\alpha = .88$) の項目平均点を自他の重なるの知覚得点として、その得点を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、被視点取得の有無の標準偏回帰係数が有意であった ($\beta = 0.73, t = 6.93, p < .001$)。被視点取得あり条件 ($M = 3.49, SD = 1.00$) は、被視点取得なし条件 ($M = 1.83, SD = 0.64$) よりも自他の重なるの知覚得点が高かった。決定係数は有意であった ($R^2 = .56, F(10,42) = 5.26, p < .001$)。多重共線性はみられなかった ($VIFs < 1.58$)。重回帰分析の結果をTable 3に示した。

好感 パートナーへの好感を測定した1項目の

Table 2 条件ごとの被共感の知覚、自他の重なるの知覚、好感および関係構築意思の平均値 (SD)

被視点取得	あり				なし			
	あり		なし		あり		なし	
感情と思考の伝達								
被共感の知覚	5.00	(0.78)	5.15	(0.77)	2.08	(0.62)	2.00	(1.07)
自他の重なるの知覚	3.24	(0.87)	3.73	(1.06)	1.60	(0.55)	2.50	(0.64)
好感	5.23	(0.80)	4.69	(1.38)	2.85	(1.17)	3.21	(1.57)
関係構築意思	4.03	(1.32)	3.56	(1.48)	2.56	(1.36)	2.64	(1.37)

得点を好感得点として、その得点を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、記述内容の評価「楽しかった」($\beta = 0.42, t = 3.51, p < .01$)、被視点取得の有無($\beta = 0.65, t = 6.15, p < .001$)および被視点取得欲求($\beta = 0.29, t = 2.22, p < .05$)に、有意な標準偏回帰係数がみられた。被視点取得あり条件($M = 4.96, SD = 1.16$)は、被視点取得なし条件($M = 3.04, SD = 1.40$)よりも好感得点が高かった。また、被視点取得欲求得点が高いほど、好感得点は高かった。決定係数は有意であった($R^2 = .56, F(10,42) = 5.25, p < .001$)。多重共線性はみられなかった($VIFs < 1.58$)。重回帰分析の結果をTable 3に示した。

関係構築意思 パートナーとの関係構築意思を測定した3項目($\alpha = .85$)の項目平均を関係構築意思得点として、その得点を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、被視点取得の有無の標準偏回帰係数が有意であった($\beta = 0.42, t = 3.20, p < .01$)。被視点取得あり条件($M = 3.79, SD = 1.42$)は、被視点取得なし条件($M = 2.60, SD = 1.36$)よりも関係構築意思得点が高かった。決定係数は有意傾向であった($R^2 = .32, F(10,42) = 1.94, p = .066$)。多重共線性はみられなかった($VIFs < 1.58$)。重回帰分析の結果をTable 3に示した。

被視点取得が対人認知に影響するプロセスの検討

被共感の知覚、自他の重なり、好感および関係構築意思それぞれの得点間の関連を検討した。相関分析の結果、すべての得点間に有意な相関がみられた($rs > .42, ps < .01$)。相関分析の結果をTable 4に示した。

相関分析の結果から変数間の関連が確認されたため、被視点取得の有無が他者への好感および関係構築意思に影響するプロセスについて検討する媒介分析を行った。検討されたモデルは、被視点取得の有無が他者への好感および関係構築意思に与える影響が被共感の知覚および自他の重なりを知覚に媒介される多重媒介モデルであった(Figure 1参照)。先述の重回帰分析から、すべての従属変数において感情と思考の伝達の有無および被視点取得欲求に被視点取得の有無との有意な相互作用効果はなく、被視点取得の有無の効果を調整する効果がみられなかったことから、媒介分析では独立変数として被視点取得の有無のみを採用した。

最初に、被視点取得の有無から好感得点および関係構築意思得点へのパスを検討した。その結果、被視点取得の有無から好感得点および関係構築意思得点へのパスは共に有意であった(順に $\beta = 0.60, p < .001$; $\beta = 0.39, p < .001$)。次に、媒介変数として被共感の知覚得点および自他の重なり

Table 3 被共感の知覚、自他の重なりを知覚、好感および関係構築意思の得点それぞれを従属変数とした重回帰分析

	被共感の知覚			自他の重なりを知覚			関係構築意思			関係構築意思		
	β	SE	t 値	β	SE	t 値	β	SE	t 値	β	SE	t 値
性別	-0.03	0.08	-0.32	0.12	0.11	1.04	-0.07	0.11	-0.66	-0.09	0.14	-0.66
記述評価(嬉しかった)	0.02	0.08	0.22	-0.05	0.11	-0.44	-0.01	0.11	-0.07	0.05	0.14	0.39
記述評価(楽しかった)	0.05	0.08	0.64	0.02	0.12	0.19	0.42	0.12	3.51 **	0.17	0.15	1.15
伝達	-0.01	0.07	-0.16	-0.20	0.10	-1.94 [†]	0.00	0.10	0.03	0.07	0.13	0.56
被視点取得	0.88	0.07	12.22 ***	0.73	0.11	6.93 ***	0.65	0.11	6.15 ***	0.42	0.13	3.20 **
被視点取得欲求伝達	0.10	0.09	1.11	0.10	0.13	0.75	0.29	0.13	2.22 *	0.27	0.16	1.69 [†]
伝達 ×被視点取得	-0.04	0.07	-0.52	-0.01	0.11	-0.11	0.07	0.11	0.68	0.04	0.13	0.29
伝達 ×被視点取得欲求	0.10	0.08	1.35	-0.07	0.11	-0.64	0.17	0.11	1.54	-0.24	0.14	-1.74 [†]
被視点取得 ×被視点取得欲求	0.06	0.08	0.69	-0.05	0.12	-0.39	-0.00	0.12	-0.03	0.03	0.15	0.21
伝達 ×被視点取得 ×被視点取得欲求	-0.02	0.08	-0.27	0.02	0.12	0.18	-0.06	0.12	-0.56	0.18	0.14	1.27

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

Table 4 被共感の知覚、自他の重なり、好感および関係構築意思の相関行列

	被共感の知覚	自他の重なり の知覚	好感
自他の重なり の知覚	.76***	—	—
好感	.65***	.67***	—
関係構築意思	.42***	.57***	.45***

*** $p < .001$

の知覚得点を投入して視点取得の有無が好感得点および関係構築意思得点に及ぼす影響を検討した。その結果、被視点取得の有無から被共感の知覚得点へのパスおよび自他の重なり
の知覚得点へのパスは有意であった（順に $\beta = 0.88, p < .001$ ； $\beta = 0.70, p < .001$ ）。自他の重なり
の知覚得点から好感得点および関係構築意思得点へのパスは有意であったものの（順に $\beta = 0.42, p < .05$ ； $\beta = 0.58, p < .01$ ）、被共感の知覚得点から好感得点および関係構築意思得点へのパスは有意でなかった（順に $\beta = 0.30, n.s.$ ； $\beta = -0.01, n.s.$ ）。そして、被視点取得の有無から好感得点および関係構築意思得点へのパスは共に有意でなくなった（順に $\beta = -0.01, n.s.$ ； $\beta = 0.04, n.s.$ ）。このことから、完全媒介モデルであることが示された。媒介分析の結果をFigure 2に示した。間接効果については、95%信頼区間を算出して検討した。すなわち、95%信頼区間に0を含まない効果を有意とした。その結果、好感および関係構築意思のどちらについても被共感の知覚得点による間接効果は有意でなく（順に95%IC [-0.13, 0.69]；95%IC [-0.37, 0.46]）、

自他の重なり
の知覚得点による間接効果のみ有意であった（順に95%IC [0.08, 0.56]；95%IC [0.14, 0.72]）。

相関分析の結果（Table 4）では、すべての変数間に有意な関連がみられた。それにもかかわらず、媒介分析では被共感の知覚得点から好感得点および関係構築意思得点へのパスが有意でなかった。このことから、媒介分析に用いられた変数間には、何らかの疑似相関がみられている可能性が考えられた。そこで、先述の媒介モデル（Figure 2）を分割して、それぞれの関連を検討した。

まず、被視点取得の有無、被共感の知覚得点および自他の重なり
の知覚得点の3変数について、被視点取得の有無が自他の重なり
の知覚得点を高める効果は、被共感の知覚得点によって媒介されている可能性があった。そこで、視点取得の有無を独立変数、自他の重なり
得点を従属変数、そして被共感の知覚得点を媒介変数とした媒介分析を行った。被視点取得の有無から自他の重なり
の知覚得点への効果を検討したところ、有意なパスが示された（ $\beta = 0.70, p < .001$ ）。媒介変数として被共感の知覚得点を投入したところ、被視点取得の有無から被共感の知覚得点へのパスは有意であり（ $\beta = 0.88, p < .001$ ）、被共感の知覚得点から自他の重なり
の知覚得点へのパスは有意であった（ $\beta = 0.61, p < .01$ ）。そして、被視点取得の有無から自他の重なり
得点へのパスは有意でなくなった（ $\beta = 0.17, n.s.$ ）。このことから、本モデルは完全媒介モデルであることが示された。95%信頼区間を用いて間接効果について検討したところ、その区

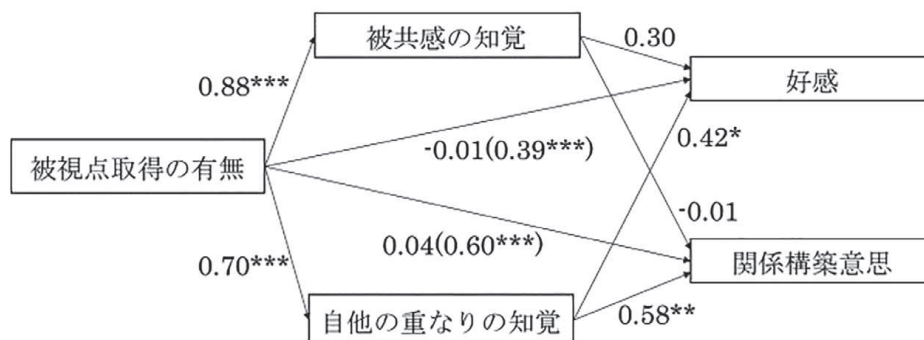


Figure 2 被視点取得の有無が他者へのポジティブな評価を促進するプロセスについての多重媒介分析（*** $p < .001$ ** $p < .01$ ** $p < .05$ ）。括弧内は媒介変数投入前の直接効果を示した。

間に0は含まれておらず、間接効果は有意であった(95%IC [0.20, 0.88])。

次に、自他の重なるの知覚得点、好感得点および関係構築意思得点の3変数それぞれにおける偏相関分析を行った。その結果、自他の重なるの知覚得点を統制変数とした際の好感得点と関係構築意思得点に有意な偏相関はみられなかった($r_p = .11$, $t(50) = 0.79$, *n.s.*)。好感得点を統制変数とした際の自他の重なるの知覚得点と関係構築意思得点、関係構築意思得点を統制変数とした際の自他の重なるの知覚得点と好感得点にはそれぞれ有意な正の関連がみられた(順に $r_p = .40$, $t(50) = 3.10$, $p < .01$; $r_p = .57$, $t(50) = 4.90$, $p < .001$)。

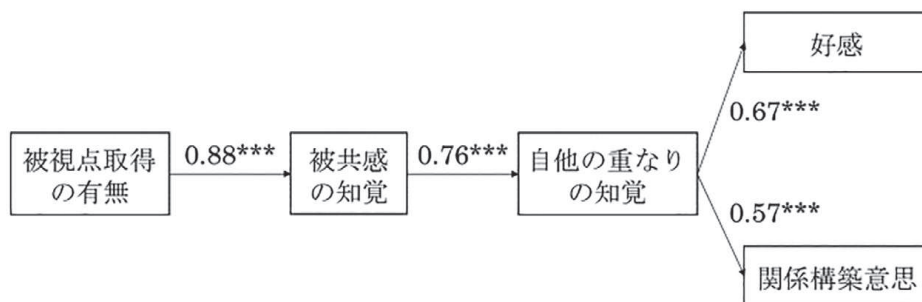
これらの媒介分析および偏相関分析の結果から、他者から視点取得されることによって被共感の知覚が高まり、それによって他者との自他の重なりが高く知覚され、その結果として他者への好感および関係構築意思が高くなると考えられた。そこで、この仮説モデルを想定しパス解析を行った。その結果、被視点取得の有無から被共感の知覚得点へのパスは有意であった($\beta = 0.88$, $p < .001$)。次に、被共感の知覚得点から自他の重なるの知覚得点へのパスは有意であった($\beta = 0.76$, $p < .001$)。最後に、自他の重なるの知覚得点から好感得点および関係構築意思得点へのパスはともに有意であった(順に $\beta = 0.67$, $p < .001$; $\beta = 0.57$, $p < .001$)。この結果から、被視点取得あり条件は、なし条件よりもパートナーからの共感をより高く知覚し、高い被共感の知覚によりパートナーとの自他の重なりが高く知覚され、自他の重なりを高く知覚したことによってパートナーへの好感およびパート

ナーとの関係構築意思が高く評価されていたことが示された。モデルの適合度指標を確認したところ、本モデルは十分にデータと適合していたと判断された($\chi^2(5) = 5.85$, $p = .32$; CFI = .995; RMSEA = .057; SRMR = .047)。パス解析の結果をFigure 3に示した。

考察

本研究では、視点取得されたことと知覚することが被共感の知覚、自他の重なるの知覚、他者への好感および他者との関係構築意思に及ぼす効果を検討した。その際、視点取得される前のコミュニケーションにおいて、感情と思考の伝達をしていたかどうか、および視点取得されたいという欲求が先述の視点取得されることもつ効果を調整するかどうかを検討した。くわえて、被視点取得の知覚が他者への好感や関係構築意思を高める効果は、被共感の知覚および自他の重なるの知覚に媒介されるのかどうかを検討した。

まず、他者に視点取得されたことをフィードバックされた被視点取得あり条件は、視点取得されなかったことをフィードバックされた被視点取得なし条件よりも、被共感の知覚得点、自他の重なるの知覚得点、好感得点および関係構築意思得点すべてを高く評価していた。このことから、他者に視点取得されたことと知覚することが、他者からの共感や他者との自己概念の重なりを高く知覚させ、また他者へのポジティブな評価を高めることが示唆され、Goldstein et al. (2014)と同様の結果が得られた。しかし、すべての従属変数において被視点取得の有無と感情と思考の伝達の有無の交互



注) *** $p < .001$

Figure 3 被視点取得の有無が他者へのポジティブな評価を促進するプロセスについてのパス解析

作用効果、被視点取得の有無と被視点取得欲求の交互作用効果、および被視点取得の有無と感情と思考の伝達の有無と被視点取得欲求の交互作用効果はみられなかった。したがって、仮説1・2は支持されなかった。

感情と思考の伝達の有無による調整効果がみられなかったのは、本研究で想定した2者間コミュニケーションがエッセイの記述課題とそれを読んだパートナーのフィードバックであったことが影響しているかもしれない。すなわち、過去の経験についてエッセイでパートナーに伝えることは難しく、感情と思考を伝達してもしていなくても、参加者は自身の感じたことや考えたことがパートナーに十分に伝達できていないと知覚されていた可能性がある。そのため、感情と思考の伝達の有無にかかわらず、他者が視点取得の手がかりを得たと知覚されなかったのかもしれない。今後の課題として、非言語的コミュニケーションが可能な状態で伝達内容の影響について検討する必要があるだろう。

被視点取得欲求が被視点取得の知覚の効果に影響しなかったことについては、パートナーの反応が詳細に把握できなかったことが影響している可能性がある。Goldstein et al. (2014) で被視点取得の知覚の効果を調整する要因が示された実験 (Experiment 6) の視点取得条件では、立候補者は学生 (ie., 参加者) に視点取得し、学生に生じるであろう心的負担を理解しているということが明示され、立候補者が学生の感情と思考についてどのように想像したかという具体的な情報が提示されていた。一方で、本研究のフィードバックは質問紙の形式で行われ、パートナーからの視点取得がどの程度であったか、またパートナーは参加者の感情と思考をどの程度想像したかという情報は提示されていたものの、パートナーが参加者の感情と思考についてどのように想像したかという情報は提示されていなかった。パートナーがどのように想像したかという具体的な情報がなかったため、パートナーに視点取得されたとしても、想像してもらいたいと考える感情と思考を想像してもらえたかどうかの判断できなかった可能性があ

る。そのため、被視点取得欲求の程度にかかわらず視点取得されたかどうかという情報のみに基づいてパートナーの評価がなされたのかもしれない。

本研究では、視点取得されることが対人認知に影響するプロセスについて媒介分析によって検討した。その結果、Goldstein et al. (2014) と同様の変数間の関係性はみられず、異なるプロセスが示唆された。具体的には、視点取得されることが被共感の知覚を高め、それによって自他の重なる知覚が高まり、その結果として他者への好感や関係構築意思が高まるというモデルが示された。Goldstein et al. (2014) とは異なるプロセスが示唆された理由として、本研究の参加者であった日本人がもつ自己観と、Goldstein et al. (2014) の参加者であった米国人のもつ自己観が異なっていたためである可能性が考えられる。北山 (1995) によれば、「西欧、特に北米中流階級の文化は、自己とは、他から切り離されたものという信念に基づいている」とする相互独立的自己観を形成し、一方で「日本を含む東洋の文化は、自己は他と根源的に結び付いているという前提」にたつ相互協調的自己観を形成するという。そして北山 (1995) は、「他の人の立場にたって」行動するということは、日本的相互協調的自己観を構成する信念および習慣のひとつだと指摘している。このことから、本研究の参加者であった日本人という相互協調的自己観を持つ人にとって、他者とお互いにそれぞれの立場にたち相互作用するという、すなわちコミュニケーションにおいて視点取得したりされたりすることは、そうすることが一般的であると考えており、習慣として行われることであった可能性がある。そのため、視点取得されるという状況は一般的な相互作用のあり方であり、自他の重なる知覚への直接効果がみられなかった可能性がある。共感とは他者との感情的なつながりをもたらすと指摘されていることから (Galinsky et al., 2008)、被共感の知覚が被視点取得の知覚から自他の重なる知覚への影響を媒介する働きをしたと考えられる。一方で、他者視点にたって行動するといった信念・習慣をもたない相互独立的自己観を持つ人にとっては、視点取得をしたり

されたりすることが習慣化されていないと考えられる。そのため、参加者が米国人であったGoldstein et al. (2014) では、被視点取得の知覚と自他の重なる知覚の間に関連がみられるモデルが示された可能性がある。今後、相互協調的自己観ないし相互独立的自己観を持つことが、他者に視点取得されたとき知覚した際の効果に及ぼす影響を検討する必要があるだろう。

最後に、本研究の限界と展望について述べる。視点取得されることが被共感の知覚を高めることについて、視点取得のターゲットに共感するという経験によって生じた信念によって、自身が視点取得された場合には共感もされていると知覚するというメカニズムが指摘されている (Goldstein et al., 2014)。したがって、視点取得されることが被共感の知覚を高めるのは、視点取得が共感を促進するということが前提となる。視点取得を他者視点でその他者の感情を想像する情動的視点取得と、他者視点でその他者の思考や動機などの認知的側面を想像する認知的視点取得に分類してそれぞれを行った場合、情動的視点取得のみが共感を促進することが指摘されている (Ozward, 1996)。したがって、視点取得されることが被共感の知覚を促進するメカニズムから考えれば、共感を促進しない認知的視点取得をされても、被共感の知覚は高まらない可能性がある。しかし、本研究では視点取得の分類は行っておらず、この点について言及はできない。また、本研究では伝達内容についても感情の伝達と思考の伝達を区別せず、感情と思考の伝達として扱った。したがって、感情的要素について他者に伝達することの効果と思考という認知的要素について他者に伝達することの効果とを区別して検討できていない。今後は、感情と認知を区別し検討する必要がある。

引用文献

- Aron, A., Aron, E. N. & Smollan, D. (1992). Inclusion of other in the self scale and the structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 596-612.
- Batson, C. D., Batson, J. G., Griffitt, C. A., Barrientos, S., Brandt, R., Sprengelmeyer, P. & Bayly, M. J. (1989). Negative-state relief and empathy-altruism hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 922-933.
- Batson, C. D., Sager, K., Garst, E., Kang, M., Rubchinsky, K. & Dawson, K. (1997a). Is empathy-induced due to self-other merging? *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 495-509.
- Batson, C. D., Polycarpou, M. P., Harmon-Jones, E., Imhoff, H. J., Mitchener, E. C., Bednar, L. L., Highberger, L. (1997b). Empathy and attitudes: Can feeling for a member of a stigmatized group improve feelings toward the group? *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 105-118.
- Berndsen, M., Wenzel, M., Thomas, E., F., & Noske, B. (2018). I feel you feel what I feel: Perceived perspective-taking promotes victims' conciliatory attitudes because of inferred emotions in the offender. *European Journal of Social Psychology*, 48, 103-111.
- Davis, M. H. (1994). *Empathy: A social psychological approach*. Madison, Wis.: Brown & Benchmark Publishers. (デイビス, M. H. 菊池章夫 (訳) (1999). 共感の社会心理学 共感の社会心理学:人間関係の基礎 川島書店)
- Davis, M. H., Conklin, L., Smith, A. & Luce, C. (1996). Effect of perspective taking on the cognitive representation of persons: A merging of self and other. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 713-726.
- Galinsky, A. D., Maddux, W. W., Gilin, D. & White, J. B. (2008). Why It Pays to Get Inside the Head of Your Opponent: The Differential Effects of Perspective Taking and Empathy in Negotiations. *Psychological Science*, 19, 378-384.
- Goldstein, N. J., Vezich, I. S. & Shapiro, J. R. (2014). Perceived perspective taking: When others walk in our shoes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 106, 941-960.
- 北山忍 (1994). 文化的自己観と心理プロセス 社会心理学研究, 10, 153-167.

- Ozward, P. A. (1996). The effects of cognitive and affective perspective taking on empathic concern and altruistic helping. *The Journal of Social Psychology, 136*, 613-623.
- 鈴木雄大・田中知恵 (2017). 視点取得および被視点取得欲求についての調査—出来事の評価および自分の反応の想像しやすさに注目して— 日本社会心理学会第58回大会発表論文集, 255.
- 登張真穂 (2000). 多角的視点に基づく共感性研究の展望 性格心理学研究, 9, 36-51.
- Stotland, E. (1969). Exploratory investigations of empathy. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 4, pp.271-313). New York: Academic Press.

In this research, we examined the effect of perceived perspective-taking (i.e., believing that another individual is taking one's perspective), communicating emotion and thoughts, and desire for getting taken perspective on perceived empathy, self-other overlap (i.e., perceived similarity, shared identity, and relationship closeness), liking for others, and relationship building. We manipulated perceived perspective-taking by eliciting feedback from other participants (who did not actually exist) and whether to communicate emotion and thoughts to others during a description task. Our data suggest that perceived perspective-taking enhances perceived empathy, self-other overlap, liking for others, and relationship building. The interaction between perceived perspective-taking, communicating emotion and thoughts, and desire for getting taken perspective was not significant. Moreover, our data indicate that perceived perspective-taking increases perceived empathy, which in turn increases self-other overlap and enhances liking for others.

Keyword: Perceived Perspective-taking, Communicating Emotion and Thoughts, Desire for Getting Taken Perspective, Perceived Empathy, Relationship Building.